

## 6/26 FRI. 28 SUN.

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)

## 「プロメテウスの創造物」序曲 作品43

ハイドンとモーツァルトの間の世代に位置するチェリストで、作曲家のルイジ・ボッケリーニ(1743～1805)。彼に作曲も師事した甥のサルヴァトーレ・ヴィガーノ(1769～1821)は、当時のスター・バレエダンサーとしてヨーロッパ各地で華々しい活躍をみせた。特に、踊りの技術に偏重することなく、総合芸術としてのバレエを目指し、パントマイムの要素を強めるなど、後のバレエのスタイルの先駆となった存在だった。

1799年にはウィーンの宮廷バレエ・マイスターに就任。新作バレエを制作するにあたり、白羽の矢が立てられたのがベートーヴェンであった。20歳の頃のボン時代、既にバレエ音楽の作曲経験があったこともあり、依頼を快諾。ヴィガーノの台本に基づき、全18曲——時間にして1時間以上にわたる音楽を書き上げた。このうち終曲は後に、変奏曲作品35と交響曲第3番《英雄》作品55の第4楽章でも変奏曲の主題として転用されていたりするのだが、現在、演奏機会が多いのは序曲のみである。

序奏付きのソナタ形式によって構成されているのだが、実はモデルになっている楽曲が存在する。それはモーツァルトのオペラ『コジ・ファン・トゥッテ』序曲だ。和音のトゥッティ(総奏)によって始まり、そこにオーボエの旋律が続くところも酷似しており、そしてテンポが上がる主部の弦楽器のパッセージも、上下を反転させた形の音形がモーツァルトにも出てくるのだ。他人の空似とは思えぬほどだが、冒頭の和音は前年に初演されたばかりの交響曲第1番と同じような手法で始まるなど、自らの個性を入れ込むことも、もちろん忘れていない。明らかな剽窃にはならないよう注意が払われているかのようである。

とりわけ展開部と終結部は、完全にモーツァルトから逸脱し、ベートーヴェンらしいコントラストの効いた音楽を聴かせてくれる。

小室 敬幸 TEXT by Takayuki Komuro

作曲：1800～1801年

初演：1801年3月28日、ウィーン

編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)

## ピアノ協奏曲 第3番 ハ短調 作品37

13歳の頃、既にチェンバロ協奏曲を書いていたルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは、15歳から改めてピアノ協奏曲を作曲し始めるも、第2番(変ロ長調)と第1番(ハ長調)の最終稿が完成したのは20代の後半。この頃から第3番(ハ短調)の構想も練られ始めたが、やはり完成までには長い時間を要した。モーツァルトのピアノ協奏曲で同じ調性をもつ第24番があまり好きになれなかったというベートーヴェンにとって、モーツァルトのスタイルを模範にしながらも、どうすれば自分の個性が十分に発揮できるのか?……という課題をクリアするまでは、この第3番を完成させるわけにはいかなかったのだろう。

転機となったのは、1802年10月。いわゆる「ハイリゲンシュタットの遺書」をしたためた後が、中期と呼ばれる時期になり、よりドラマティックな音楽を志向するようになって、主題となる旋律もシンプルなものが増えていく。主和音(ド・ミ♭・ソ)の分散和音からはじまる本曲も、その方向性に合致しているといえるだろう。1803年4月5日の初演時点では、ピアノパートの楽譜は完成されないまま演奏され、翌年になって弟子のフェルディナント・リース(1784～1838)が演奏することになり、その際に改めてピアノパートの楽譜が仕上げられた。

ソナタ形式による第1楽章は、冒頭の4小節で弦楽器が第1主題を提示。すぐさま、このひとつの旋律から、聴いた印象の異なる旋律を手際よく生み出していくことで音楽を進めていく。展開部では緊張感を高める方向には向かわず、再現部冒頭にクライマックスを迎えるのも中期らしい特徴だ。主調(♭3つのハ短調)から最も遠い♯4つのホ長調へ転じてしまう第2楽章でもソナタ形式によっており、ピアノが主体となって繊細な音楽を紡いでいく。ロンドと銘打たれた第3楽章は、中間部まではロンド形式そのものなのだが、後半部の第1主題が度々展開されたりと、ソナタ形式の要素が強まっていく。ラストは第1主題が長調になり、プレストで駆け抜けていく。

小室 敬幸 TEXT by Takayuki Komuro

作曲:1796～1803年/1804年

初演:1803年4月5日、ウィーン。作曲家自身による指揮・独奏

編成:独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部

## 6/26 FRI. 28 SUN.

フェリックス・メンデルスゾーン(1809～1847)

## 交響曲 第3番 イ短調 作品56「スコットランド」

20歳の時、ロンドンで外交官をしている親友を頼りにイギリス旅行へ赴いたフェリックス・メンデルスゾーンは、当時の人気作家ウォルター・スコットにひと目会えれば……という願いゆえ、スコットランドにも足を伸ばした。当地で訪れたホリールードハウス宮殿の朽ち果てた礼拝堂にて、彼はシラーによる戯曲の題材にもなったブラッディ・メアリーの異名をもつ女王メアリー・スチュアート(1516～1558)に思いを馳せ、12小節のコーラルをスケッチする。この旅行から13年後に完成した本曲の冒頭で表れる物悲しい音楽は、このスケッチをもとにしているのである。

作品は全4楽章、すべてソナタ形式で構成され、切れ目なく演奏されていく。

**第1楽章**は前述したコーラルが序奏となり、テンポが上がる主部からはプロテスタントを大迫害し、多くの人々を処刑したメアリー女王の肖像のようにも聴こえてくる。最後にはコーラルが回帰し、**第2楽章**へと突入。楽しいスケルツォだが、主題はコーラルから派生している。

続く**第3楽章**は緩徐楽章。前奏の後に第1ヴァイオリンによって奏でられていく第1主題は、アヴェ・マリア(=メアリー)の歌詞に基づいて書かれていると主張する研究者もあり、いわばメアリーへの哀歌だといえる。

**第4楽章**はフィナーレに相応しい、嵐のような音楽が連なっていくが、終盤で一旦沈静化。明るい終結部へと転じ、ホルンが輝かしい旋律を奏するが、これはメンデルスゾーンの過去の合唱曲《アヴェ・マリア》作品23 No. 2からとられたもの。やはり、最後までメアリーを強く意識しているのだろう。

小室 敬幸 TEXT by Takayuki Komuro

作曲：1829～1842年

初演：1842年3月3日、ライプツィヒ。作曲者自身による指揮、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦

編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦5部